

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2005-73798  
(P2005-73798A)

(43) 公開日 平成17年3月24日(2005.3.24)

(51) Int.Cl.<sup>7</sup>

A61B 10/00  
A61B 1/00

F I

A61B 10/00 1 O 3 B  
A61B 1/00 3 3 4 D

テーマコード (参考)

4 C 0 6 1

審査請求 未請求 請求項の数 2 O L (全 20 頁)

(21) 出願番号 特願2003-305570 (P2003-305570)  
(22) 出願日 平成15年8月28日 (2003.8.28)

(71) 出願人 000000376  
オリンパス株式会社  
東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号  
(74) 代理人 100076233  
弁理士 伊藤 進  
(72) 発明者 須田 直人  
東京都渋谷区幡ヶ谷2丁目43番2号 オ  
リンパス光学工業株式会社内  
Fターム(参考) 4C061 AA00 BB01 CC02 DD03 GG15

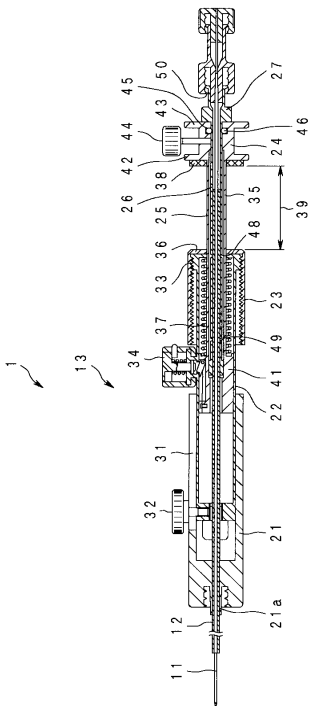
(54) 【発明の名称】 内視鏡用穿刺針装置

(57) 【要約】

【課題】 病理確定診断を行うための十分な検体量を容易に採取することが可能な内視鏡用穿刺針装置を実現する。

【解決手段】 穿刺針装置 1 は、内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なコイルシース 1 2 と、このコイルシース 1 2 に挿通して進退自在に体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な穿刺針と、コイルシース 1 2 の基端側に設け、穿刺針の進退を操作する補助器具本体 1 3 と、この補助器具本体 1 3 に設け、穿刺針を突出させるための突出機構と、を具備して構成される。穿刺針装置 1 は、穿刺針の先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成して構成される。

【選択図】 図 3



## 【特許請求の範囲】

## 【請求項 1】

内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なシースと、  
前記シースに挿通して進退自在に体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な穿刺針と、  
前記シースの基端側に設け、前記穿刺針の進退を操作する操作部と、  
前記操作部に設け、前記穿刺針を突出させるための突出機構と、  
を具備し、  
前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする内視鏡用穿刺針装置。

10

## 【請求項 2】

前記穿刺針に挿通して進退自在な内針を有し、  
前記穿刺針は、前記内針を前記穿刺針の先端部から突出させたとき、前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状に形成した刃面が前記内針とともにほぼ連続する傾斜を形成するようにしたことを特徴とする請求項 1 に記載の内視鏡用穿刺針装置。

## 【発明の詳細な説明】

## 【技術分野】

## 【0001】

本発明は、内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿通されて、体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取するための内視鏡用穿刺針装置に関する。

20

## 【背景技術】

## 【0002】

近年、医療診断分野においては、病理確定診断が広く行われている。この病理確定診断は、例えば、超音波診断装置を用いた超音波断層像観察下において、検体を採取して行う診断方法である。この診断方法は、超音波断層像をガイドにして内視鏡の処置具挿通用チャンネルを介して長尺の穿刺針を被検体部まで誘導して穿刺し、検体を採取している。

## 【0003】

このような病理確定診断を行うために、例えば特開 2001-37765 号公報や特開平 8-150145 号公報に記載されているように、内視鏡の処置具挿通用チャンネル入口に固定できる内視鏡用穿刺針装置が提案されている。

30

## 【0004】

ここで、一般に、上記内視鏡用穿刺針装置に用いられる従来の穿刺針の刃先形状は、図 24 (a)、(b) に示すように通常の注射針の刃先形状と同様な構造となっている。すなわち、従来の穿刺針 100 は、極細管の先端を切断し、この切断した先端部に少なくとも 1 つ以上の刃面 100a を形成している。なお、ここで、図 24 (a) は内針 (スタイレット) 101 を突出させた状態の穿刺針 100 の先端部を示す断面図、図 24 (b) は従来の穿刺針 100 の先端部を示す斜視図である。

## 【0005】

しかしながら、一般に注射針は、生体組織に刺入することを本来の目的としている。上記のように注射針の刃先形状と同様な構造に形成している従来の穿刺針は、この刃先が生体組織を切り裂きながら刺入するため、生体組織を積極的に内部に取り込む構造になっていない。そのため、上記従来の穿刺針は、被検体部の状態、例えば、生体組織が硬い場合には、内部に検体が採取されない場合があったり、又は検体が採取されたとしても極微量な量でしかなかった。また、シリンジ等によって針内部を陰圧にして組織を吸引する吸引生検を行う場合には、生体組織がばらばらに採取されてしまうという不都合がある。

40

## 【0006】

他の従来の内視鏡用穿刺針装置としては、例えば、特開平 10-216134 号公報に記載されているように、上記穿刺針を挿通して進退自在な内針の側部に切り欠き部を形成した構成の装置が提案されている。

50

上記特開平 10 - 216134 号公報に記載の内視鏡用穿刺針装置は、上記内針を突出させて切り欠き部に被検体部の生体組織を挟み込んだ後、上記穿刺針を前進させて上記内針を収納することで生体組織を切断して検体を採取するようになっている。

【0007】

しかしながら、上記特開平 10 - 216134 号公報に記載の内視鏡用穿刺針装置は、検体を細長く採取することが可能であるが、切り欠き部の機械的強度を確保するために、切り欠きの深さが制限され、十分な厚みの検体を採取することができない。

従って、上記従来の内視鏡用穿刺針装置を用いた生検において、採取された検体量が病理確定診断を行うためには不十分であった場合、十分な量が採取されるまで、繰り返し生検を実施しなければならず、煩雑であった。

10

【0008】

また、一般に、採取した検体の診断法には、細胞診と組織診との 2 通りがある。細胞診は、一つ一つの細胞を診て診断するものである。このため、細胞診では、検体が良性なのか悪性なのかの判断が難しく、病理確定診断に至るまでの情報が得られ難い。

【0009】

一方、組織診は、生体組織が集まった 1 つの塊を全体的に診て診断する方法であるので、病理確定診断を行うのに足り得る情報が容易に得られる。

従って、病理確定診断を行う際には、組織診が行えるような検体量としてある程度の組織状の塊として検体を採取することが望ましい。

【特許文献 1】特開 2001 - 37765 号公報

20

【特許文献 2】特開平 8 - 150145 公報

【特許文献 3】特開平 10 - 216134 号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0010】

解決しようとする問題点は、従来の内視鏡用穿刺針装置では、病理確定診断を行うための十分な大きさの検体量を採取することが困難であった点である。

【課題を解決するための手段】

【0011】

本発明の請求項 1 に記載の内視鏡用穿刺針装置は、内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なシースと、前記シースに挿通して進退自在に体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な穿刺針と、前記シースの基端側に設け、前記穿刺針の進退を操作する操作部と、この操作部に設け、前記穿刺針を突出させるための突出機構と、を具備し、前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴としている。

30

また、本発明の請求項 2 に記載の発明は、請求項 1 に記載の内視鏡用穿刺針装置において、前記穿刺針に挿通して進退自在な内針を有し、前記穿刺針は、前記内針を前記穿刺針の先端部から突出させたとき、前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状に形成した刃面が前記内針とともにほぼ連続する傾斜を形成するようにしたことを特徴としている。

40

【発明の効果】

【0012】

本発明の内視鏡用穿刺針装置は、病理確定診断を行うための十分な検体量を容易に採取することが可能であるという利点を有する。

【発明を実施するための最良の形態】

【0013】

以下、図面を参照して本発明の実施例を説明する。

【実施例 1】

【0014】

図 1 ないし図 16 は本発明の第 1 実施例に係わり、図 1 は第 1 実施例の内視鏡用穿刺針

50

装置が内視鏡の処置具挿入口に取り付けられている状態を示す説明図、図 2 は図 1 の内視鏡用穿刺針装置の外観図、図 3 は図 2 の内視鏡用穿刺針装置の断面図、図 4 は図 3 のコイルシースを示す外観図、図 5 は図 3 の穿刺針部を示す説明図、図 6 は図 3 のスイッチ部を示す断面説明図、図 7 は図 5 の穿刺針の先端側を示す説明図であり、図 7 ( a ) は穿刺針の先端側外観図、図 7 ( b ) は同図 ( a ) の断面図、図 8 は内視鏡用穿刺針装置の前半側の動作を示す説明図であり、図 8 ( a ) は穿刺針の先端がコイルシースに収容されている穿刺準備状態を示す断面図、図 8 ( b ) は第 3 スライド部を最大限に前進させて、穿刺針の先端がコイルシース先端より突出している状態を示す断面図、図 8 ( c ) は内針を抜去した状態を示す断面図、図 9 は内視鏡用穿刺針装置の後半側の動作を示す説明図であり、図 9 ( a ) は調整筒を回転させて突出長を設定している状態を示す断面図、図 9 ( b ) は穿刺針の先端を設定した突出長の長さだけ高速に突出している状態を示す断面図、図 9 ( c ) は穿刺針装置を内視鏡の処置具挿通用チャンネルから抜去する際に第 3 スライド部を最大限に基端側に引いている状態を示す断面図、図 10 は穿刺針部の先端がコイルシースに収容されている穿刺準備状態を示す説明図、図 11 は穿刺針部の先端をコイルシース先端より突出させて被検体部の手前まで前進させた際の状態を示す説明図、図 12 は穿刺針部の先端を被検体部に刺入し、目標病変部内まで導いている際の状態を示す説明図、図 13 は穿刺針部の先端が目標病変部内まで到達して内針を抜去した際の状態を示す説明図、図 14 はスイッチ部を操作して穿刺針部を目標病変部内へ深く刺入した際の状態を示す説明図、図 15 は穿刺針部の先端が検体を取り込んだままの状態目標病変部内から抜去している際の状態を示す説明図、図 16 は穿刺針の変形例を示す説明図であり、図 16 ( a ) は変形例の穿刺針を示す断面図、図 16 ( b ) は同図 ( a ) の穿刺針に内針が挿通している際の断面図である。

#### 【 0 0 1 5 】

図 1 に示すように本実施例の内視鏡用穿刺針装置（以下、単に穿刺針装置という）1 は、超音波内視鏡あるいは内視鏡 2 の図示しない処置具挿通用チャンネルを介して体腔内に導かれるようになっている。

内視鏡 2 は、体腔内に挿入される細長の挿入部 3 と、この挿入部 3 の後端に設けられた操作部 4 と、この操作部 4 の後端に配置された接眼部 5 と、図示しない光源装置に接続されるコネクタ 7 を有するユニバーサルコード 6 とを備えている。なお、図示の内視鏡 2 は、光学式内視鏡であるが、この内視鏡の前記接眼部 5 にテレビカメラヘッドを取り付けることにより、内視鏡光学像を光電変換して図示しないカメラコントロールユニット（以下、CCU）に接続することで内視鏡画像を得られるようにも使用される。また、本実施例に用いられる内視鏡としては、電子式内視鏡として挿入部先端部内に撮像光学系及び撮像装置を内蔵し、信号線を操作部から延出する前記ユニバーサルコードの末端に設けられたコネクタを介して CCU に接続して内視鏡画像を得られる内視鏡であっても良いことは、勿論である。

#### 【 0 0 1 6 】

前記内視鏡の操作部 4 の前端側には、例えば前記穿刺針装置 1 などの処置具を挿入する処置具挿入口 8 が設けられている。この処置具挿入口 8 は、図示しない処置具挿通用チャンネルに連通している。処置具挿通用チャンネルは、挿入部 3 内に配置され、挿入部先端部 3 a に形成されている処置具導出口 9 a に開口している。このため、穿刺針装置 1 は、前記処置具挿入口 8 から処置具挿通用チャンネル内に挿通することによって、先端側の穿刺針部 11 を処置具導出口 9 a から突出することができるようになっている。

#### 【 0 0 1 7 】

図 2 に示すように前記穿刺針装置 1 は、体腔内の被検体部に穿刺する穿刺針部 11（図 5 参照）と、この穿刺針部 11 が挿通されて前記内視鏡の処置具挿通用チャンネルを介して体腔内に挿入するコイルシース 12（図 4 参照）と、このコイルシース 12 を内部に配設し、後端側から挿入した前記穿刺針部 11 を前記コイルシース 12 に挿通した状態で該穿刺針部 11 を先端側へ突出させるための突出機構を設けた操作部としての補助器具本体 13 とで主に構成されている。

## 【 0 0 1 8 】

前記補助器具本体 1 3 は、前記穿刺針部 1 1 を突出させる突出機構を備え、前記内視鏡 2 の前記処置具挿入口 8 に着脱自在な固定部 2 1 a を備えた中空構造の固定筒 2 1 と、この固定筒 2 1 の内側で長手方向に移動可能に挿入される中空構造の第 1 スライド部 2 2 と、前記穿刺針部 1 1 の突出機構による突出長を調整するための調整筒 2 3 と、前記第 1 スライド部 2 2 に進退可能に内設されて後端側に指掛け部 2 4 を備えた中空構造の第 2 スライド部 2 5 ( 図 3 参照 ) と、この第 2 スライド部 2 5 に進退可能に挿入されるパイプ部 2 6 及びこのパイプ部 2 6 の基端側に固定されたパイプ口金 2 7 を備えた中空構造の第 3 スライド部 2 8 とで主に構成されている。

## 【 0 0 1 9 】

次に、図 3 を用いて、前記補助器具本体 1 3 の内部構造を説明する。

前記固定筒 2 1 の一側面には、長手方向に溝 3 1 が設けられており、第 1 固定ネジ 3 2 が前記溝 3 1 を通して前記第 1 スライド部 2 2 の先端付近に螺合している。この第 1 スライド部 2 2 の基端側外周には、雄ねじ部 3 3 が設けられている。この雄ねじ部 3 3 には、前記調整筒 2 3 の雌ねじが螺合している。前記第 1 スライド部 2 2 の中央付近には、前記穿刺針部 1 1 を突出させるためのスイッチ部 3 4 が設けられている。

## 【 0 0 2 0 】

前記調整筒 2 3 は、先端側が雄ねじ部 3 3 と螺合可能に開口し、後端側には前記第 2 スライド部 2 5 を構成する細径部 3 5 が貫通する穴を形成した平坦な調整筒底部 3 6 を有している。前記調整筒 2 3 は、この内部に前記第 2 スライド部 2 5 を前記第 1 スライド部 2 2 に対して先端側に付勢する付勢部材としてのコイルばね 3 7 を設けている。

## 【 0 0 2 1 】

前記調整筒 2 3 は、前記第 1 スライド部 2 2 に対して回転させることにより前後し、基端側へは前記調整筒底部 3 6 が前記指掛け部 2 4 のダンパ 3 8 に接するまで移動可能である。そして、前記調整筒 2 3 は、前記調整筒底部 3 6 と前記ダンパ 3 8 との間の距離で突出機構による突出長 ( コイルばね 3 7 の付勢力により穿刺針部 1 1 が突出する長さ ) 3 9 を定義している。なお、後述する図 8 ( a ) の状態では、前記調整筒 2 3 が最も先端側に位置しているので、前記突出長 3 9 が最大突出長 4 0 である。

## 【 0 0 2 2 】

前記第 2 スライド部 2 5 は、先端側から順に太径部 4 1 と、前記細径部 3 5 と、前記指掛け部 2 4 とで構成されている。前記太径部 4 1 と前記細径部 3 5 とは、前記第 1 スライド部 2 2 内に挿入されている。前記太径部 4 1 は、前記第 1 スライド部 2 2 の内径よりやや小さい程度の外径を有している。前記細径部 3 5 は、前記コイルばね 3 7 の内径より細い外径のパイプ状の部材であり、前記第 3 スライド部 2 8 のパイプ部 2 6 を挿入している。

## 【 0 0 2 3 】

前記第 2 スライド部 2 5 の前記細径部 3 5 の外側で前記第 1 スライド部 2 2 の内側には、前記コイルばね 3 7 が挿入されている。このコイルばね 3 7 の基端側は、前記第 1 スライド部 2 2 の基端側に固定されて、先端側は前記第 2 スライド部 2 5 の前記太径部 4 1 の基端側に固定されている。このコイルばね 3 7 は、圧縮ばねであり、上述したように前記第 2 スライド部 2 5 を前記第 1 スライド部 2 2 に対して常に先端側に付勢している。

## 【 0 0 2 4 】

前記指掛け部 2 4 には、先端側に円盤状のダンパ固定板 4 2 と基端側に円盤状の指掛け板 4 3 が備えられている。前記指掛け部 2 4 の中心付近には、長手軸と垂直に前記第 2 固定ネジ 4 4 が螺合している。前記ダンパ固定板 4 2 の先端側には、ゴム等の衝撃吸収性のある材料で形成されたリング状の前記ダンパ 3 8 が固定されている。前記指掛け部 2 4 の内径の一部には、円環状の溝部 4 5 が形成されており、ゴム等の材料で形成された弾性リング 4 6 がはめ込まれている。この弾性リング 4 6 の内径は、前記第 3 スライド部 2 8 の前記パイプ部 2 6 の外径よりやや小さくなっている。

## 【 0 0 2 5 】

10

20

30

40

50

前記第２スライド部２５の細径部３５の外周には、前記ダンパ３８の先端側の面をゼロとして先端側に向けて目盛り４７（図２参照）が形成されている。この目盛り４７は、前記ダンパ３８と前記調整筒底部３６との間によって定義される前記突出長３９を示している。

【００２６】

前記パイプ部２６の外周には、円環状の溝である二つのクリック溝が形成されており、それぞれ基端側の溝が第１クリック溝４８、先端側の溝が第２クリック溝４９となっている。これら第１クリック溝４８、第２クリック溝４９は、前記弾性リング４６が嵌ったときに、軽い係止力を発生させ、さらに操作者にクリック感を感じさせる程度の溝である。

【００２７】

前記第２クリック溝４９は、前記第１クリック溝４８の先端側に形成されている。これら第１クリック溝４８と第２クリック溝４９との距離は、前記最大突出長４０以上になっている。また、前記第３スライド部２８の前記パイプ口金２７の基端は、雄ねじのルアー口金５０になっている。

【００２８】

なお、前記第３スライド部２８の前記パイプ部２６表面には、彩色されたリングで構成される穿刺針退避指標（不図示）を設けることが可能であり、前記第３スライド部２８が完全に基端側に引っ張られ、前記第２クリック溝４９にてクリック状態になった時にのみ視認可能になる位置に設けられている。（図２では、前記第３スライド部がより先端側に位置しているため、前記第２スライド部２５の内部に位置して視認できないようになっている。）

この穿刺針退避指標によって、操作者は間接的に前記穿刺針部１１が前記コイルシース１２内に收容されていることが認識できて、この穿刺針退避指標を確認してから前記内視鏡２から抜去することで、抜去の際に前記穿刺針部１１で前記内視鏡２の処置具挿通用チャンネルを穿孔することが防止できるようになっている。

【００２９】

次に、図４を用いて、前記補助器具本体１３の前記第１スライド部２２に着脱可能に固定されている前記コイルシース１２を説明する。

前記コイルシース１２は、コイルシース挿入部５１と、コイルシース基端部５２と、コイルシース口金部５３とから構成されている。

【００３０】

前記コイルシース挿入部５１は、前記内視鏡２の処置具挿通用チャンネルと同程度の長さを有し、可撓性を有する金属製のコイルで構成されている。このコイルシース挿入部５１は、前記穿刺針部１１の外径よりも大きな内径で且つ前記内視鏡２の処置具挿通用チャンネルより小さな外径を有しており、前記内視鏡２の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在になっている。前記コイルシース挿入部５１は、前記コイルシース口金部５３に取り付けて組み合わせた状態において、前記固定筒２１を貫通して先端側に突出するようになっている。

【００３１】

前記コイルシース口金部５３は、前記補助器具本体１３の前記第１スライド部２２の先端に対して着脱可能に螺合するようになっている。前記コイルシース基端部５２は、前記コイルシース口金部５３の基端側に接続されている。前記コイルシース基端部５２は、前記コイルシース挿入部５１と同様のコイルで構成されており、前記補助器具本体１３の前記第３スライド部２８の途中まで挿入されるようになっている。

【００３２】

次に図５を用いて、体腔内の被検体部に穿刺する前記穿刺針部１１を説明する。

前記穿刺針部１１は、前記補助器具本体１３の前記パイプ口金２７に設けられた前記ルアー口金５０に着脱可能に装着されるようになっている。前記穿刺針部１１は、前記コイルシース１２に挿通して進退自在に体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な穿刺針（内視鏡用穿刺針）５５と、この穿刺針５５に固定された穿刺

10

20

30

40

50

針口金 5 6 とから構成されている。

【 0 0 3 3 】

前記穿刺針 5 5 は、内針（スタイレット）5 7 が進退自在に挿通されるようになっている。この内針 5 7 には、内針口金 5 8 が固定されている。前記穿刺針口金 5 6 と前記内針口金 5 8 とは、着脱可能に組み合わされており、前記穿刺針 5 5 に前記内針 5 7 が挿通された状態において、前記内針 5 7 の先端は前記穿刺針 5 5 先端より先端側に突出するようになっている。

【 0 0 3 4 】

次に図 6 を用いて、前記補助器具本体 1 3 の前記第 1 スライド部 2 2 に設けられている前記スイッチ部 3 4 の構造を説明する。

10

図 6 に示すように前記スイッチ部 3 4 のスイッチ座 6 1 は、前記第 1 スライド部 2 2 の中心付近に形成された切り欠き部 6 2 の上部側に設けられている。前記スイッチ部 3 4 は、前記スイッチ座 6 1 に安全装置としての安全リング 6 3 とスイッチ機構としてのボタン 6 4 とが組み付いている。

【 0 0 3 5 】

前記安全リング 6 3 は、リング状の部材であり、前記スイッチ座 6 1 に対して長手軸に垂直な軸回りに回動可能に組み付けられている。この安全リング 6 3 の円筒面には、ピン状の部材であるロック指標 6 5 が放射状に貫通して固定されている。前記ロック指標 6 5 は、前記安全リング 6 3 の内面及び外面に突出している。

【 0 0 3 6 】

20

前記ボタン 6 4 は、前記安全リング 6 3 の内側に組み込まれており、ボタンヘッド 6 6 と軸 6 7 とプッシャ 6 8 とから構成されている。前記ボタンヘッド 6 6 は、前記安全リング 6 3 の内径と同程度の管状部材である。前記軸 6 7 は、前記ボタンヘッド 6 6 と同軸の棒状部材であり、前記スイッチ座 6 1 に進退自由に貫通している。前記プッシャ 6 8 は、前記軸 6 7 の他端に固定されており、前記切り欠き部 6 2 に挿入可能な大きさを有している。

【 0 0 3 7 】

前記軸 6 7 の前記スイッチ座 6 1 と前記ボタンヘッド 6 6 との間には、スイッチばね 6 9 が組み込まれている。前記ボタン 6 4 は、このスイッチばね 6 9 により常に図の上方に付勢されている。前記ボタンヘッド 6 6 の下面には、前記ロック指標 6 5 が入り込むことのできる凹みとしてスイッチ溝 7 1 が形成されている。

30

【 0 0 3 8 】

前記ロック指標 6 5 と前記スイッチ溝 7 1 とは、略 1 8 0 度ずれた位置関係にあり、前記安全リング 6 3 を前記軸 6 7 回りに回転操作して前記ロック指標 6 5 を前記スイッチ溝 7 1 に一致させない限り、前記ボタンヘッド 6 6 の底部と前記ロック指標 6 5 とが当接することで、前記ボタン 6 4 の押下操作を行うことができない規制状態となっている。

【 0 0 3 9 】

そして、この状態から前記安全リング 6 3 を回動操作して、前記ロック指標 6 5 が前記スイッチ溝 7 1 と同じ位置になるまで回動すると、前記スイッチ部 3 4 は、ロック指標 6 5 とスイッチ溝 7 1 との位置が一致して、前記ボタン 6 4 を押し下げ可能となる。すなわち、前記スイッチ部 3 4 は、前記穿刺針部 1 1 を突出可能とする規制解除状態とすることができる。

40

【 0 0 4 0 】

前記第 2 スライド部 2 5 の前記太径部 4 1 は、一部が切り欠かれており、前記コイルばね 3 7 の付勢力を一時的に係止する係止機構としての掛け金 7 2 が組み込まれている。この掛け金 7 2 の基端側には、長手軸に垂直な揺動軸 7 3 が貫通している。前記掛け金 7 2 は、前記揺動軸 7 3 を中心に揺動可能に支持されている。この揺動軸 7 3 の揺動により、前記掛け金 7 2 の先端側は、前記第 2 スライド部 2 5 の前記太径部 4 1 外径に収納された状態と前記太径部 4 1 から突出した状態とを取り得るようになっている。前記掛け金 7 2 の先端側には、板ばね 7 4 が取り付けられており、その一端は前記掛け金 7 2 の先端側を

50

前記太径部 4 1 から突出させるように付勢している。

【 0 0 4 1 】

図 6 に示すように前記掛け金 7 2 は、先端側が前記第 1 スライド部 2 2 の前記切り欠き部 6 2 に係止しており、前記コイルばね 3 7 によって先端側に付勢されている前記第 2 スライド部 2 5 が前進するのを阻止している。上述したように前記スイッチ部 3 4 は、前記安全リング 6 3 を前記軸 6 7 回りに回転操作して規制解除状態にし、前記ボタンヘッド 6 6 を押し下げることにより、前記プッシャ 6 8 が前記切り欠き部 6 2 に進入し、この切り欠き部 6 2 に係止している前記掛け金 7 2 を押し下げると、これら切り欠き部 6 2 と掛け金 7 2 との係止が解消される。これによって、前記スイッチ部 3 4 は、前記第 2 スライド部 2 5 を先端側に付勢している前記コイルばね 3 7 の付勢力を解放するようになっている。 10

【 0 0 4 2 】

そして、前記穿刺針部 1 1 は、前記第 2 スライド部 2 5 が予め設定した前記突出長 3 9 だけ高速に前進することにより、後述するように設定した前記突出長 3 9 の長さだけ高速に突出し、目標病変部に刺入するようになっている。

【 0 0 4 3 】

ここで、従来の穿刺針は、刃先形状が通常の注射針の刃先形状と同様な構造であり、この刃先が生体組織を切り裂きながら刺入するため、生体組織を積極的に内部に取り込む構造になっていない。このため、従来の穿刺針は、被検体部の状態例えば、生体組織が硬い場合、内部に検体が採取されないか、又は検体が採取されたとしても極微量な量である。 20

【 0 0 4 4 】

そこで、本実施例では、先端部の外周面に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成して穿刺針 5 5 を構成したものである。

すなわち、前記穿刺針 5 5 は、図 7 ( a ) , ( b ) に示すように極細管の先端を長手軸方向に対して斜めに切断して先端部を形成し、この先端部の外周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面 8 1 を形成している。なお、図 7 ( a ) , ( b ) に示す穿刺針 5 5 は、先端側から前記内針 5 7 を突出させた状態を表している。

【 0 0 4 5 】

そして、前記穿刺針 5 5 は、前記内針 5 7 を先端部から突出させたとき、前記刃面 8 1 が前記内針 5 7 とともにほぼ連続する傾斜を形成するように形成している。 30

このことにより、前記穿刺針 5 5 は、前記内針 5 7 を挿入したままでも前記内針 5 7 とともに比較的抵抗なく手でスムーズに被検体部へ深く刺入でき、例えば、被検体部の深部部位に存在している目標病変部へ刺入することが可能となる。

【 0 0 4 6 】

更に、前記穿刺針 5 5 は、前記内針 5 7 を抜去した後、上述した操作により前記穿刺針部 1 1 を突出させることで、穿刺ルート上の不要な生体組織を取り込むことなく、内部に目標病変部の検体のある程度の組織状の塊として取り込み、周辺組織から切り取ることが可能となる。

【 0 0 4 7 】

このように構成される穿刺針装置 1 の動作を図 8 ないし図 1 5 を用いて説明する。 40

まず、内視鏡挿入部 3 の先端部 3 a は、目的部位付近に挿入されて位置される。

次に、図 1 0 に示すように穿刺針部 1 1 の先端がコイルシース 1 2 に收容されている状態において、コイルシース 1 2 が内視鏡 2 の処置具挿通用チャンネルに挿入され、固定部 2 1 a が処置具挿入口 8 に固定される。このとき、穿刺針部 1 1 の先端は、内視鏡挿入部 3 の先端部 3 a 内に挿入しているコイルシース 1 2 の先端よりわずかに基端側に位置してコイルシース 1 2 内に收容される。

【 0 0 4 8 】

このとき、図 8 ( a ) に示すように第 1 固定ネジ 3 2 は締め込んだ状態であり、上述したように調整筒 2 3 が最も先端側に位置している。このため、穿刺針部 1 1 の突出長 3 9 は、最大突出長 4 0 となる。

また、第 1 クリック溝 4 8 は、弾性リング 4 6 にはまっている状態である。掛け金 7 2 の先端側は、第 1 スライド部 2 2 の切り欠き部 6 2 に係止しており、コイルばね 3 7 の付勢力によって先端側に付勢されている第 2 スライド部 2 5 が前進するのを阻止している。

【 0 0 4 9 】

次に第 1 固定ネジ 3 2 をゆるめ、第 1 スライド部 2 2 を先端側に前進させると、固定筒 2 1 の溝 3 1 に案内されて、第 1 スライド部 2 2 が前方に移動する。

そして、内視鏡 2 の光学視野もしくは超音波画像の観察下において、コイルシース 1 2 先端は、被検体部 9 0 付近まで前進させられる。そして、再び第 1 スライド部 2 2 が第 1 固定ネジ 3 2 を締め込まれて固定される。

【 0 0 5 0 】

次に第 2 固定ネジ 4 4 がゆるめられ、第 3 スライド部 2 8 が第 2 スライド部 2 5 に対して進退可能にされる。そして、第 3 スライド部 2 8 は、パイプ口金 2 7 を把持して前進される。第 3 スライド部 2 8 は、弾性リング 4 6 と第 1 クリック溝 4 8 によって軽い係止力で係止されているが、手動により容易に係止を解除でき、前進させることができる。

【 0 0 5 1 】

すると、図 8 ( b ) に示すように穿刺針部 1 1 が前進し、穿刺針部 1 1 先端がコイルシース 1 2 先端より突出する。なお、図 8 ( b ) では、補助器具本体 1 3 は、第 3 スライド部 2 8 を最大限に前進させた状態を示している。この操作により、図示しない超音波観測装置により得た超音波画像の観察下において、穿刺針部 1 1 は、図 1 1 に示すように被検体部 9 0 の手前まで前進され、図 1 2 に示すように被検体部 9 0 に刺入されて、目標病変部内まで導かれる。このとき、穿刺針部 1 1 は、穿刺針 5 5 が内針 5 7 とともに比較的抵抗なく手動でスムーズに被検体部へ深く刺入できる。

【 0 0 5 2 】

穿刺針部 1 1 先端が目標病変部内まで到達したら、図 8 ( c ) に示すように内針口金 5 8 が穿刺針口金 5 6 から外されて、図 1 3 に示すように内針 5 7 が抜去される。

次に検体を採取したい距離、すなわちコイルばね 3 7 によって突出させたい距離が測定される。操作者は、測定した距離に応じて目盛り 4 7 を読みながら、図 9 ( a ) に示す調整筒 2 3 を回転させて所望の位置まで移動させて突出長 3 9 を設定する。

【 0 0 5 3 】

次に、第 2 固定ネジ 4 4 が締め込まれ、第 3 スライド部 2 8 を第 2 スライド部 2 5 に対して進退不能にしておく。これはコイルばね 3 7 による突出時に第 3 スライド部 2 8 が後退してしまうのを防止するためである。

次に、操作者は、スイッチ部 3 4 を操作して突出機構により穿刺針部 1 1 を自動で突出させる。ここで、更に吸引を行うことによって、検体 ( 組織 ) は、穿刺針 5 5 の内部により取り込まれ易くなる。このため、穿刺針口金 5 6 に図示しない吸引装置を接続して吸引を行っても良い。

【 0 0 5 4 】

スイッチ部 3 4 は、図 6 で説明した規制状態から安全リング 6 3 を回動操作され、ロック指標 6 5 がスイッチ溝 7 1 と同じ位置になるまで回される。ロック指標 6 5 は、安全リング 6 3 の外面にも突出しているので、ロック指標 6 5 の位置は操作者に視覚的にも触覚的にも把握可能である。そして、ロック指標 6 5 とスイッチ溝 7 1 との位置が一致するとボタン 6 4 が押し下げ可能となる。

【 0 0 5 5 】

ここで、スイッチ部 3 4 のボタンヘッド 6 6 を押し下げると、切り欠き部 6 2 と掛け金 7 2 との係止が解除される。

そして、図 9 ( b ) に示すようにコイルばね 3 7 の付勢力で先端側に付勢されている第 2 スライド部 2 5 が、突出長 3 9 だけ高速に前進する。このとき、ダンパ 3 8 は、第 3 スライド部 2 8 が調整筒 2 3 に衝突する際の衝撃を吸収するようになっている。

【 0 0 5 6 】

このとき、第 3 スライド部 2 8 は、第 2 固定ネジ 4 4 によって第 2 スライド部 2 5 に固

10

20

30

40

50

定されており、さらに穿刺針部 11 が第 3 スライド部 28 に固定されている。このため、第 2 スライド部 25 が突出長 39 だけ高速に前進すると共に、第 3 スライド部 28 も突出長 39 だけ高速に前進するのに伴って、穿刺針部 11 も同時に高速に前進する。すなわち、ボタン 64 のボタンヘッド 66 を押下操作することにより、穿刺針部 11 の先端は設定した突出長 39 の長さだけ高速に突出する。

【0057】

すると、穿刺針部 11 は、図 14 に示すように目標病変部内へ深く刺入される。そして、図 7 (a), (b) で説明したように穿刺針 55 は、内部に目標病変部の検体のある程度の組織状の塊として取り込み、周辺組織から切り取ることができる。

【0058】

そして、第 2 固定ネジ 44 が緩められ、図 9 (c) に示すように第 3 スライド部 28 が基端側に最大限に引かれる。すると、図 15 に示すように穿刺針部 11 の先端は、検体を取り込んだままの状態目標病変部内から抜去される。そして、穿刺針部 11 は、コイルシース 12 内に収容される。次に固定部 21 a の係合が解除されて穿刺針装置 1 が内視鏡の処置具挿通用チャンネルから抜去される。

この結果、本実施例の穿刺針装置 1 は、病理確定診断を行うために十分な検体量を 1 回で採取することができ、手術時間の短縮が可能となる。

【0059】

なお、前記穿刺針は、図 16 (a), (b) に示すように先端部を形成しても良い。

図 16 (a), (b) に示すように、穿刺針 55 B は、極細管の先端を長手軸方向に対して垂直に切断して先端部を形成し、この先端部の外周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面 81 b を形成している。

【0060】

これにより、本変形例の穿刺針 55 B は、上記第 1 実施例とほぼ同様な効果を得ることに加え、内針 57 とともに形成される傾斜が更に連続的であるのでよりスムーズに目標病変部内へ刺入できる。更に、本変形例の穿刺針 55 B は、先端が垂直であるので、組織が逃げず、より多くの検体が取れる。

【0061】

なお、本実施例の穿刺針は、先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を、先端部の全周に形成しているが、前記先端部の略半周に形成しても良いし、前記先端部の円周に沿って間欠的に形成しても良く、或いは前記先端部の一部を残し略全周に形成してもよいものである（この点は、後述する第 2 実施例及び各変形例にも同様に当てはまる。）。

【実施例 2】

【0062】

図 17 ないし図 23 は本発明の第 2 実施例に係わり、図 17 は第 2 実施例の穿刺針を示す断面図、図 18 は穿刺針を目標病変部の手前に導いた際の状態を示す説明図、図 19 は吸引を行って目標病変部を穿刺針の内部に引き込んだ際の状態を示す説明図、図 20 はスイッチ部を操作して穿刺針を目標病変部内へ深く刺入した際の状態を示す説明図、図 21 は穿刺針の先端が検体を取り込んだままの状態目標病変部内から抜去されている際の状態を示す説明図、図 22 は穿刺針の変形例を示す説明図であり、図 22 (a) は第 1 変形例の穿刺針の断面図、図 22 (b) は第 2 変形例の穿刺針の断面図、図 22 (c) は第 3 変形例の穿刺針の断面図、図 23 は更なる穿刺針の変形例を示す説明図であり、図 23 (a) は第 4 変形例の穿刺針の断面図、図 23 (b) は第 5 変形例の穿刺針の断面図である。

【0063】

上述した第 1 実施例は、前記穿刺針の先端部に対して外周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成して構成しているが、第 2 実施例は前記穿刺針の先端部に対して内周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成して構成する。それ以外の構成は上記第 1 実施例と同様であるので説明を省略し、同一構成には同じ符号を付して説明する。

10

20

30

40

50

## 【 0 0 6 4 】

すなわち、図 1 7 に示すように第 2 実施例の穿刺針装置は、極細管の先端を長手軸方向に対して垂直に切断（変形例として斜めに切断しても良い。）して先端部を形成し、この先端部の内周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面 8 1 c を形成した穿刺針 5 5 C を設けている。

## 【 0 0 6 5 】

この構成により、前記穿刺針 5 5 C は、前記被検体部 9 0 への刺入時、前記刃面 8 1 c によって目標病変部の検体を切り取り、内部にある程度の組織状の塊として取り込むことが可能となる。なお、それ以外の構成は、上記第 1 実施例とほぼ同様なので説明を省略する。

10

## 【 0 0 6 6 】

このように構成される第 2 実施例の穿刺針装置の動作を図 1 8 ないし図 2 1 を用いて説明する。なお、第 2 実施例の穿刺針装置は、目標病変部が体表近くの被検体部 9 0 に存在している場合において用いられる。

## 【 0 0 6 7 】

このため、第 2 実施例の穿刺針装置は、最初から内針 5 7 が必要なく、上記第 1 実施例の図 8 及び図 9 において、内針口金 5 8 が穿刺針口金 5 6 から外されて内針 5 7 が抜去された状態において用いられる。それ以外の第 2 実施例の穿刺針装置の動作は、図 1 8 に示すように穿刺針部 1 1 を被検体部 9 0 の手前に導くまでは、上記第 1 実施例の図 8 及び図 9 とほぼ同様（但し、内針口金 5 8 が穿刺針口金 5 6 から外されて内針 5 7 が抜去された状態）であり、説明を省略する。

20

次に、操作者は、穿刺針部 1 1 先端から検体を採取したい所定の距離を測定し、設定する。そして、操作者は、スイッチ部 3 4 を操作して突出機構により穿刺針部 1 1 を自動で突出させる。

## 【 0 0 6 8 】

ここで、更に吸引を行うことによって、検体（組織）は、穿刺針 5 5 C の内部により取り込まれ易くなる。このため、前記穿刺針口金 5 6 に図示しない吸引装置を接続して吸引を行う。図 1 9 に示すように、穿刺針部 1 1 の穿刺針 5 5 C は、前記吸引によって目標病変部の一部を内部に引き込む。

そして、スイッチ部 3 4 が操作されると、穿刺針部 1 1 は、設定された突出長 3 9 の長さだけを高速に突出する。すると、穿刺針部 1 1 の穿刺針 5 5 C は、図 2 0 に示すように目標病変部内へ深く刺入されて、その内部に検体のある程度の組織状の塊として取り込み、周辺組織から切り取る。

30

## 【 0 0 6 9 】

次に、第 3 スライド部 2 8 が基端側に最大限に引かれることにより、図 2 1 に示すように穿刺針部 1 1 の穿刺針 5 5 C 先端が検体を取り込んだままの状態目標病変部内から抜去され、コイルシース 1 2 内に収容される。そして、穿刺針装置は、内視鏡の処置具挿通用チャンネルから抜去される。

## 【 0 0 7 0 】

これにより、第 2 実施例の穿刺針装置は、穿刺針 5 5 C の刃面 8 1 c が先端部の内周面に形成されているので、穿刺針 5 5 C の刺入によって切り取られた検体（組織）がその内部により積極的に取り込まれ易くなるという効果を得ることができる。

40

## 【 0 0 7 1 】

なお、前記穿刺針は、図 2 2（a）～（c）に示すような先端形状に形成しても良い。

図 2 2（a）に示す穿刺針 5 5 D は、上記第 2 実施例の穿刺針 5 5 C に対して内周面に、組織引っ掛け保持用の段部 8 1 d を形成して構成されている。この構成により、前記穿刺針 5 5 D は、目的部位内へ刺入した後、内部に入った検体を前記段部 8 1 d により引っ掛けて切り取ることで、周辺組織からより切り取り易く、また切り取った検体（組織）が脱落しにくくなる。従って、前記穿刺針 5 5 D は、内部に取り込んだ検体に対して周辺組

50

織からの切り取り、回収の効果を更に高めることが可能となり、検体採取性が更に向上する。

【 0 0 7 2 】

また、図 2 2 ( b ) に示す穿刺針 5 5 E は、上記第 2 実施例の穿刺針 5 5 C に対して刃面 8 1 e を変位させ ( 片寄せ ) て形成したものである。この構成により、前記穿刺針 5 5 E は、前記穿刺針 5 5 D と同様に内部に取り込んだ検体に対して周辺組織からの切り取りの効果を更に高めることが可能となり、検体採取性が更に向上する。

【 0 0 7 3 】

さらに、図 2 2 ( c ) に示す穿刺針 5 5 F は、先端部の内周面及び外周面の両面全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面 8 1 b を形成して構成したものである。この構成により、前記穿刺針 5 5 F は、被検体部への刺入の効果を更に高めることが可能となり、刺入性が向上する。 10

【 0 0 7 4 】

さらにまた、前記穿刺針は、図 2 3 ( a ) , ( b ) に示すような先端部の形状に形成しても良い。

図 2 3 ( a ) に示す穿刺針 5 5 G は、極細管の先端を長手軸方向に対して湾曲状にえぐって切断して先端部を形成し、この先端部の内周面の全周に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面 8 1 g を形成している。この構成により、前記穿刺針 5 5 G は、検体が比較的硬い場合や繊維質の場合に穴あけパンチ状に刺入して被検体部への刺入の効果を更に高めることが可能となり、刺入性が向上する。 20

【 0 0 7 5 】

また、図 2 3 ( b ) に示す穿刺針 5 5 H は、前記穿刺針 5 5 G に対し、更に外周面の中央部付近に斜面状の刃面 8 1 h を形成して構成されている。この構成により、前記穿刺針 5 5 H は、前記穿刺針 5 5 G に対し、被検体部への刺入の効果を更に高めることが可能となり、刺入性が向上する。

【 0 0 7 6 】

なお、本発明は、以上述べた実施例のみに限定されるものではなく、発明の要旨を逸脱しない範囲で種々変形実施可能である。

【 0 0 7 7 】

[ 付 記 ]

30

( 付 記 項 1 )

内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なシースと、  
前記シースに挿通して進退自在に体腔内の被検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な穿刺針と、  
前記シースの基端側に設け、前記穿刺針の進退を操作する操作部と、  
前記操作部に設け、前記穿刺針を突出させるための突出機構と、  
を具備し、

前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする内視鏡用穿刺針装置。

【 0 0 7 8 】

40

( 付 記 項 2 )

前記穿刺針は、前記先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を、前記先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に形成したことを特徴とする付記項 1 に記載の内視鏡用穿刺針装置。

【 0 0 7 9 】

( 付 記 項 3 )

前記穿刺針に挿通して進退自在な内針を有し、  
前記穿刺針は、前記内針を前記穿刺針の先端部から突出させたとき、前記穿刺針の先端部の外周面、内周面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状に形成した刃面が前記内針とともにほぼ連続する傾斜を形成するようにしたことを特徴とする付記項 1 に 50

記載の内視鏡用穿刺針装置。

【0080】

(付記項4)

前記穿刺針は、先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に、先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を、前記先端部の全周、略半周、円周に沿って間欠的、或いは一部を残して略全周のいずれかに形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

【0081】

(付記項5)

前記穿刺針は、極細管の先端を長手軸方向に対して斜めに切断して先端部を形成し、この先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

10

【0082】

(付記項6)

前記穿刺針は、極細管の先端を長手軸方向に対して垂直に切断して先端部を形成し、この先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

【0083】

(付記項7)

前記穿刺針は、極細管の先端を長手軸方向に対して先端側から湾曲状に切断して先端部を形成し、この先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

20

【0084】

(付記項8)

前記穿刺針は、前記穿刺針の先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を片寄せ(変位させ)て形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

【0085】

(付記項9)

前記穿刺針は、極細管の先端を長手軸方向に対して先端側から湾曲状に切断して先端部を形成し、この先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成し、更に前記湾曲部の中央部付近に前記刃面を形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

30

【0086】

(付記項10)

前記穿刺針は、内部に入った生体組織を引っ掛けて切り取るための保持用段部を前記内周面に形成したことを特徴とする付記項1に記載の内視鏡用穿刺針装置。

【0087】

(付記項11)

内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なシースと、  
前記シースを挿通、及び進退自在な穿刺針と、  
前記穿刺針を挿通、及び進退自在な内針と、  
前記シースの基端側に位置し、前記穿刺針及び前記内針の進退を操作する操作部と、  
を有する内視鏡用穿刺針装置において、  
前記穿刺針の先端部の外周面あるいは内周面のほぼ全周に斜面状の刃面を形成し、且つ前記操作部に前記穿刺針の突出機構を設けたことを特徴とする内視鏡用穿刺針装置。

40

【0088】

(付記項12)

内視鏡の処置具挿通用チャンネルに挿脱自在なシースに挿通して進退自在に体腔内の被

50

検体部に穿刺し、生体組織を採取する管状に形成された長尺な内視鏡用穿刺針であって、先端部の外周面、内周面、内外周両面の少なくとも一方に、先端に向かって尖鋭となる斜面状の刃面を形成したことを特徴とする内視鏡用穿刺針。

【図面の簡単な説明】

【0089】

【図1】第1実施例の内視鏡用穿刺針装置が内視鏡の処置具挿入口に取り付けられている状態を示す説明図である。

【図2】図1の内視鏡用穿刺針装置の外観図である。

【図3】図2の内視鏡用穿刺針装置の断面図である。

【図4】図3のコイルシースを示す外観図である。

10

【図5】図3の穿刺針部を示す説明図である。

【図6】図3のスイッチ部を示す説明図である。

【図7】図5の穿刺針の先端側を示す説明図である。

【図8】内視鏡用穿刺針装置の前半側の動作を示す説明図である。

【図9】内視鏡用穿刺針装置の後半側の動作を示す説明図である。

【図10】穿刺針部の先端がコイルシースに収容されている穿刺準備状態を示す説明図である。

【図11】穿刺針部の先端をコイルシース先端より突出させて被検体部の手前まで前進させた際の状態を示す説明図である。

【図12】穿刺針部の先端を被検体部に刺入し、目標病変部内まで導いている際の状態を示す説明図である。

20

【図13】穿刺針部の先端が目標病変部内まで到達して内針を抜去した際の状態を示す説明図である。

【図14】スイッチ部を操作して穿刺針部を目標病変部内へ深く刺入した際の状態を示す説明図である。

【図15】穿刺針部の先端が検体を取り込んだままの状態でも目標病変部内から抜去している際の状態を示す説明図である。

【図16】穿刺針の変形例を示す説明図である。

【図17】第2実施例の穿刺針を示す断面図である。

【図18】穿刺針部を目標病変部の手前に導いた際の状態を示す説明図である。

30

【図19】吸引を行って目標病変部を穿刺針の内部に引き込んだ際の状態を示す説明図である。

【図20】スイッチ部を操作して穿刺針部を目標病変部内へ深く刺入した際の状態を示す説明図である。

【図21】穿刺針部の先端が検体を取り込んだままの状態でも目標病変部内から抜去されている際の状態を示す説明図である。

【図22】穿刺針の変形例を示す説明図である。

【図23】更なる穿刺針の変形例を示す説明図である。

【図24】従来の穿刺針を示す説明図である。

【符号の説明】

40

【0090】

1 穿刺針装置（内視鏡用穿刺針装置）

2 内視鏡

3 挿入部

8 処置具挿入口（処置具挿通用チャンネル入口）

9 a 処置具導出口

11 穿刺針部

12 コイルシース

13 補助器具本体

21 固定筒

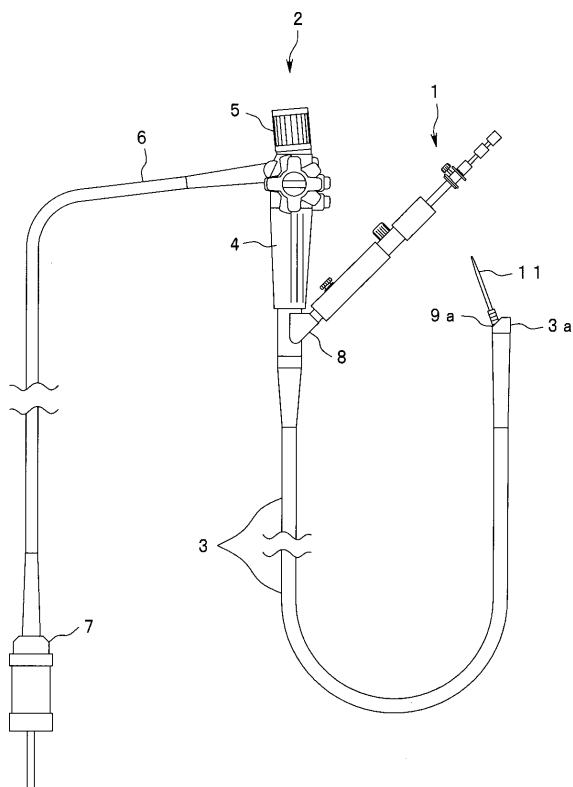
50

- 2 1 a 固定部
- 2 2 第 1 スライド部
- 2 3 調整筒
- 2 5 第 2 スライド部
- 2 8 第 3 スライド部
- 3 2 第 1 固定ネジ
- 3 4 スイッチ部
- 3 7 コイルばね
- 4 4 第 2 固定ネジ
- 5 5 穿刺針（内視鏡用穿刺針）
- 5 6 穿刺針口金
- 5 7 内針
- 5 8 内針口金
- 8 1 刃面

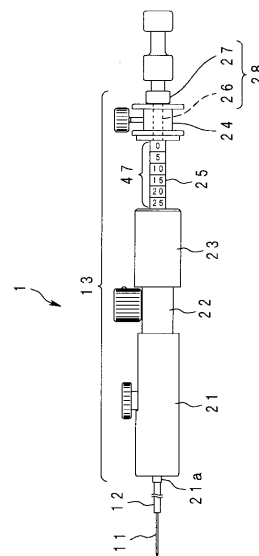
10

代理人 弁理士 伊藤 進

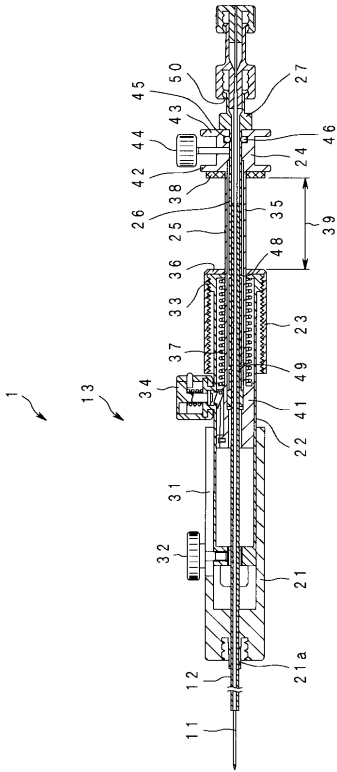
【 図 1 】



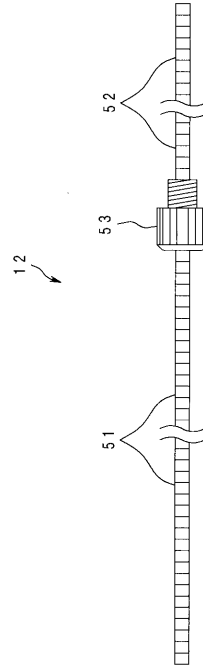
【 図 2 】



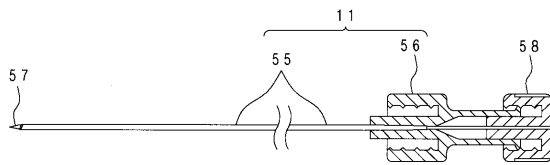
【図 3】



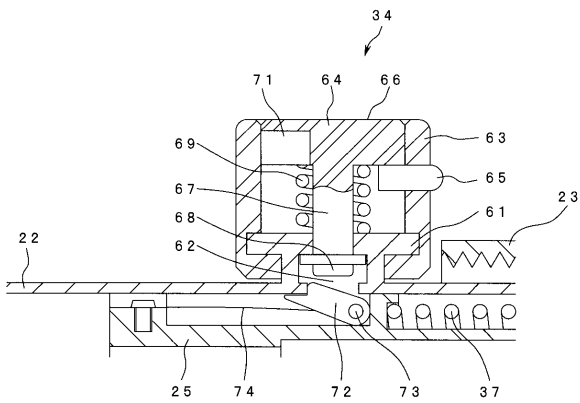
【図 4】



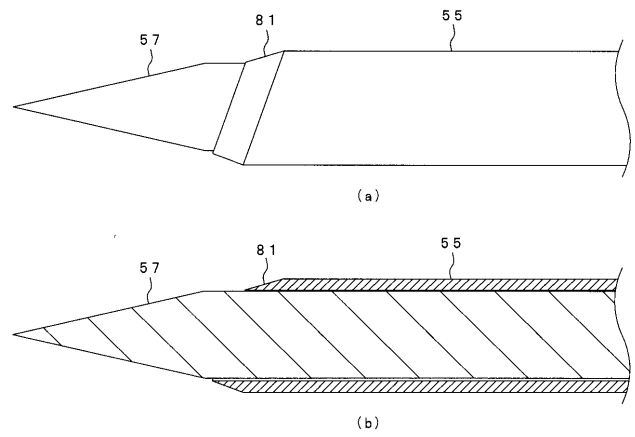
【図 5】



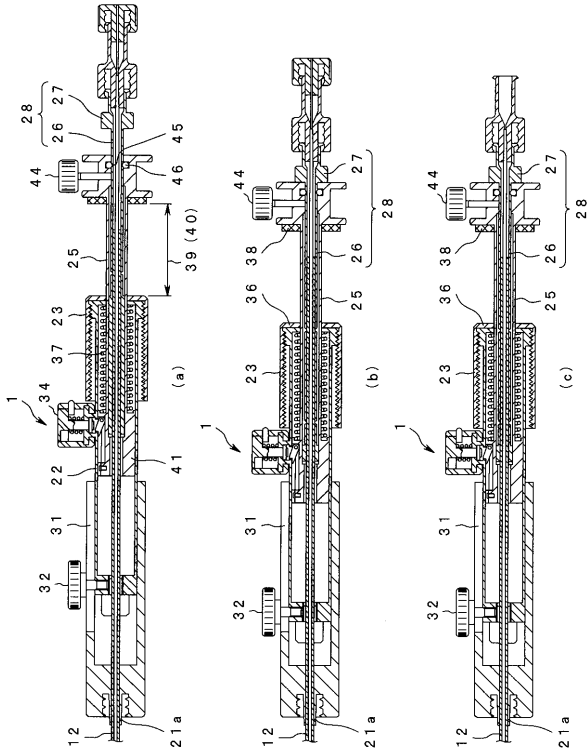
【図 6】



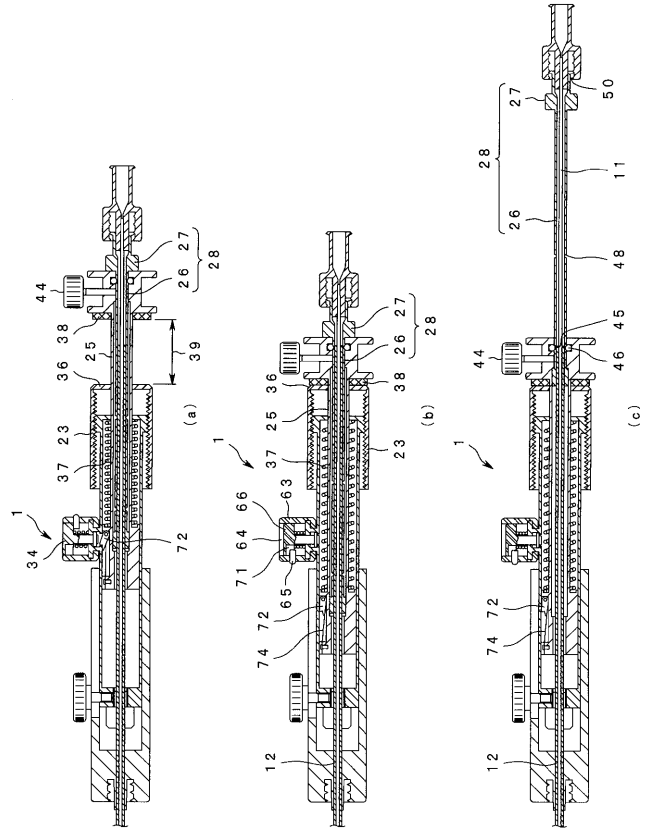
【図 7】



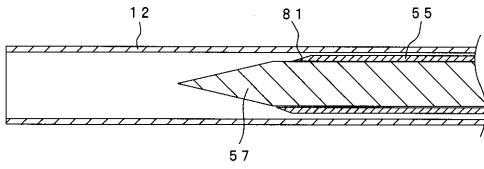
【図 8】



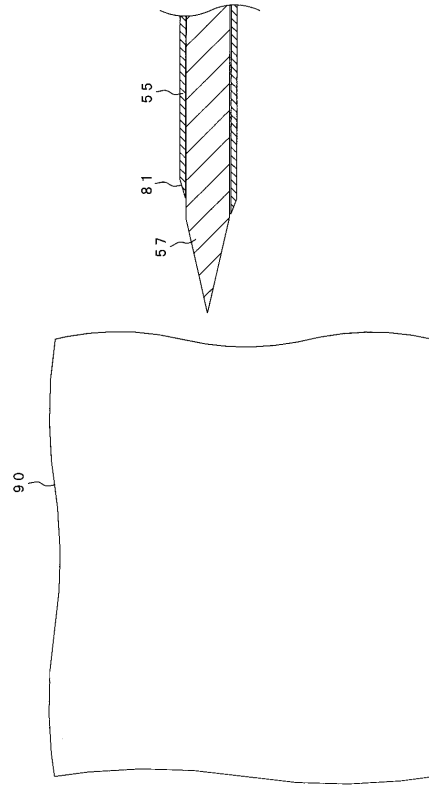
【図 9】



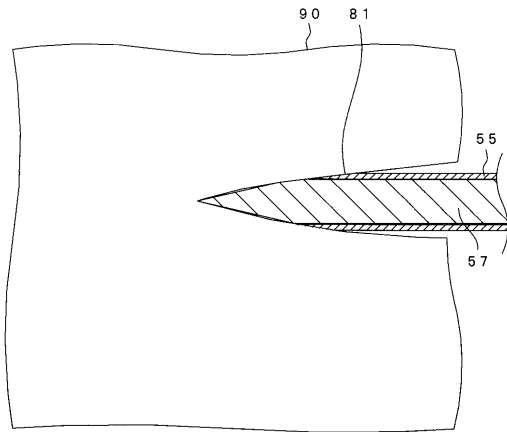
【図 10】



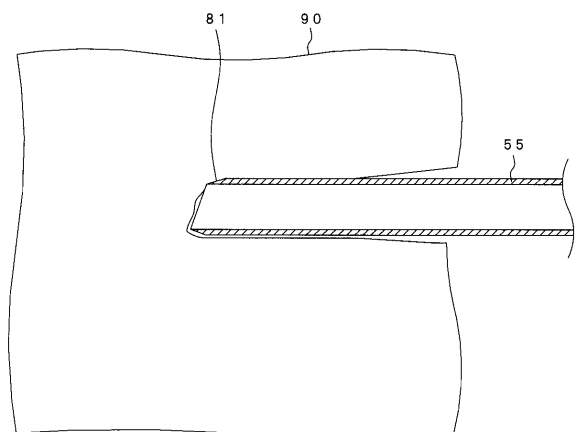
【図 11】



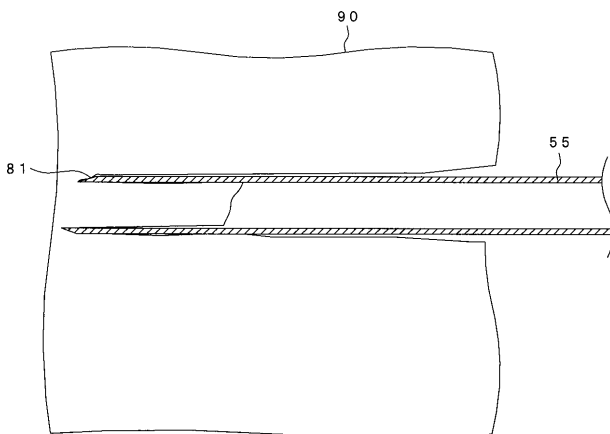
【図 1 2】



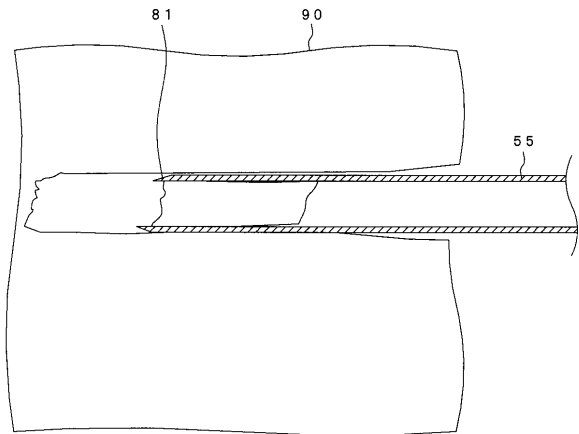
【図 1 3】



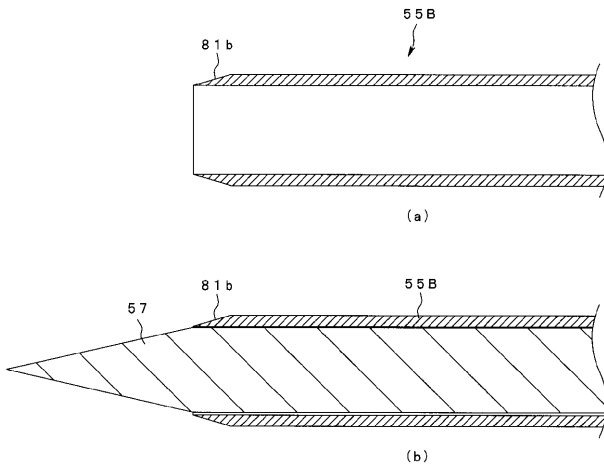
【図 1 4】



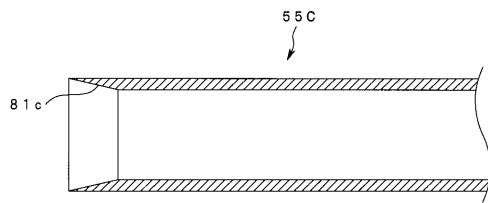
【図 1 5】



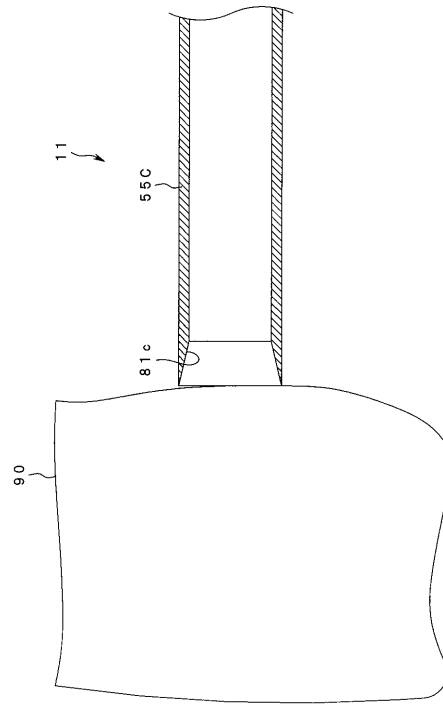
【図 16】



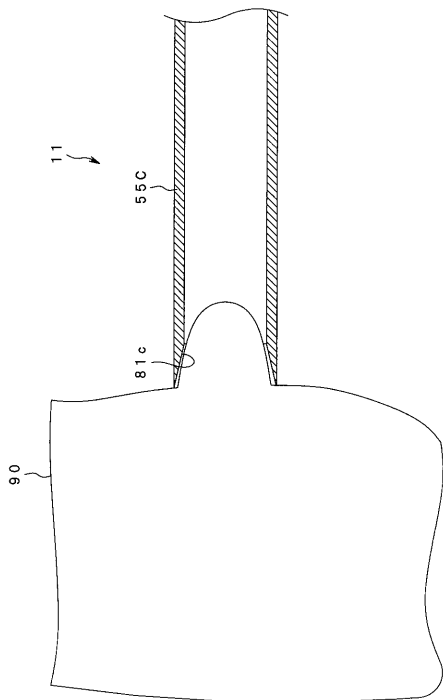
【図 17】



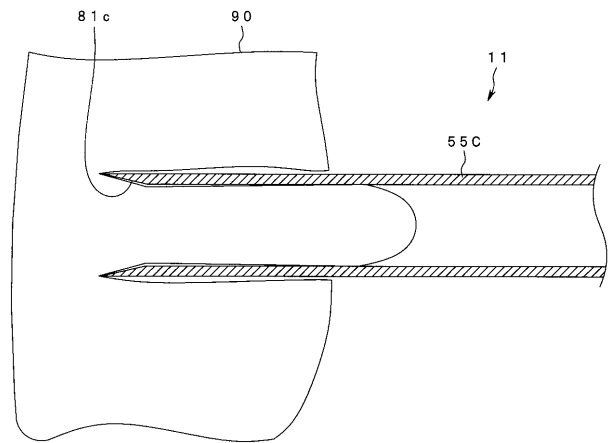
【図 18】



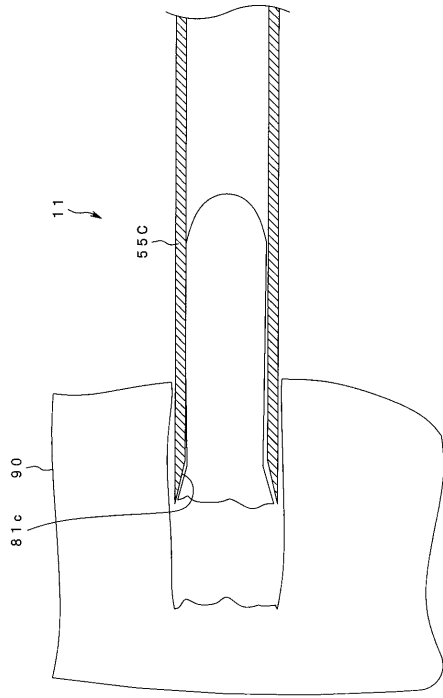
【図 19】



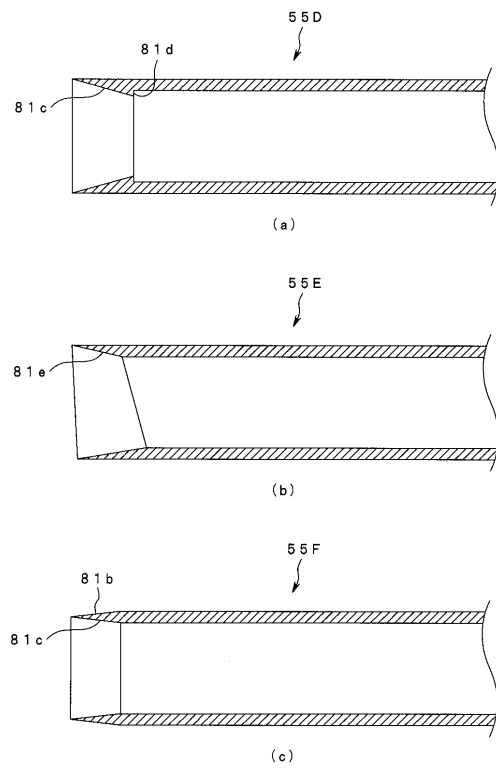
【図 20】



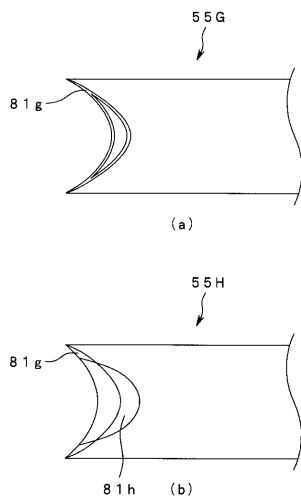
【図 2 1】



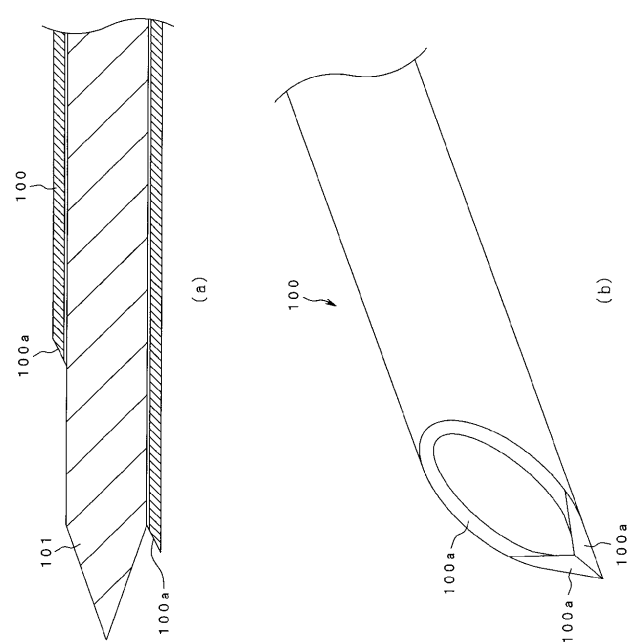
【図 2 2】



【図 2 3】



【図 2 4】



专利名称(译)	内视镜用穿刺针装置		
公开(公告)号	<a href="#">JP2005073798A</a>	公开(公告)日	2005-03-24
申请号	JP2003305570	申请日	2003-08-28
[标]申请(专利权)人(译)	奥林巴斯株式会社		
申请(专利权)人(译)	奥林巴斯公司		
[标]发明人	須田直人		
发明人	須田 直人		
IPC分类号	A61B10/02 A61B1/00 A61B10/00		
CPC分类号	A61B1/00133		
FI分类号	A61B10/00.103.B A61B1/00.334.D A61B1/018.515 A61B10/02.110 A61B10/02.110.H A61B10/04		
F-TERM分类号	4C061/AA00 4C061/BB01 4C061/CC02 4C061/DD03 4C061/GG15 4C161/AA00 4C161/BB01 4C161/CC02 4C161/DD03 4C161/GG15		
代理人(译)	伊藤 进		
外部链接	<a href="#">Espacenet</a>		

#### 摘要(译)

要解决的问题：实现用于内窥镜的穿刺针装置，其有助于收集足够量的样本以用于病理确认的诊断。ZSOLUTION：穿刺针装置1配备有线圈护套12，该线圈护套12插入用于内窥镜的内部治疗附件的插入通道中并从中移除，长穿刺针插入线圈护套12中，穿刺部位到通过向前和向后自由移动在体腔中进行测试，并形成管状以获得生物组织，辅助装置的主体13设置在线圈护套12的近端侧，用于操作穿刺针的前后移动，以及设置在主体13上的突出机构，用于使穿刺针突出。穿刺针装置1具有倾斜的刀片表面，该刀片表面朝向外周表面和内周表面上的远端变尖锐，或者至少一个在穿刺针的远端部分上。Z

